

図書館報

第1号
発行人
学校法人
了徳寺大学
理事長
了徳寺健二

図書館報

発刊によせて

本の匂い

了徳寺大学学長

増山 茂

本の匂いは嫌いでではなかった。田舎から東京に出てきて俺も大人になったかと感じられたのは、神田・本郷をはじめ早稲田や中央線沿線の古本屋巡りを始めた時である。本は時間と空間を越えて語りかけてくる親しい友人だ。一方、大学図書館書架の重畳たる大系は自分の未熟さ不勉強さを強く叱責する厳しい教師だ。referenceを頼りに細かい

雑誌文献を広くあさり深く掘り下げ、ついに書籍に包まれて知の泥沼に沈む深夜に、己の非力さを悟るのだった。

しかし時代は変わった。古本屋はいまやブックオフである。今の私にとって神田の本屋はamazonである。図書館そのものも

変わる必要がある。教育・研究機関である大学図書館では、できる限り多くの文献資料を収集し、容易に閲覧に供する条件を整備することとされる。しかし、細分化される学問領域、指数関数的に増大する出版物（テキスト・書画・音声・映像）を考えると、知識の結晶すべてを収集し閲覧に供するなどいかなる大組織にも不可能である。

図書館に何日も詰めきりとなり文献のコピーに溺れながら書き上げるのが当然であった論文制作課程は、いまやこぎれいなパソコンの前に座って行うテレビゲームと化した。この時代に図書館はなにが可能だろうか。

生まれたての我が了徳寺大学図書館が雑誌や蔵書数を目標にすることはできない。静かな環境やゆったりとした閲覧機能、すぐれたデータベースアクセス機能などはどんな図書館にとっても必要な条件である。これに加え小さいけどもきらりと光

る了徳寺大学独自の図書館像を作り上げていただきたい。

こういうと、新しい機器を入れる、情報化に対応した施設が必要だ、となる。もちろんそれらには必要である。しかし、最も大切な要素はヒトである。本の近くにすることが好き、触っただけで雑誌の違いがわかる、深夜に認識の泥沼にはまり込んだ知の狩人を助けることができる、プロフェッショナルな職員である。本の匂いがわかるヒトだ。図書館長以下の有能な職員に心から期待します。

アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』(Ernest Satow, A Diplomat in Japan. 坂田精一訳、岩波文庫、青425-1、425-2)

副学長

山内久明

アーネスト・サトウ(一八四三〜一九四三)とは誰か。日本人かと見紛うその姓は、ロンドンに移住したドイツ人の父の出身地名に由来する。文人外交官・日本研究者として大成することに

なるサトウは、一八六二年九月、

イギリス外務省日本語通訳生として初来日。直後に起こる「生麦事件」は、翌年、薩英戦争に発展。幕末から明治への政治的・社会的激動を自ら体験し、イギリス公使館(一八五九年開設、日英の大使交換は一九〇五年)に一八八二年まで勤務。その後、駐シヤム(タイ)、ウルグアイ、モロッコ各公使を経て、駐日本国公使(一八九五〜一九〇〇)、駐清国公使(一九〇〇〜一九〇五)を歴任。『一外交官の見た明治維新』はシヤム時代の一八八五年から一八八七年に執筆開始後いったん中断、イギリス帰還後に居を定めたイングランド西南部のオットリーで一八九九年に執筆再開、一九二二年に出版された。一八六二年から一八六九年に到る激動の、克明精緻で真に迫る記録である。

幕末におけるイギリスの対日政策は、フランスが幕府を支持したのに対して、幕府と朝廷のいずれにも偏しない立場を取っていた。日本語通訳生は、イギリス外務省内では下級職であったが、初代オールコック公使と、一八六五年からその後を継ぐパー

クス公使のもとで、サトウは堪能な日本語を駆使して重責を果たした。政府の立場とは別にサトウ個人は、横浜で発行された週刊新聞に匿名で連載した『英国策論』(一八六七)において独自の見解を表明した。すなわち、將軍は諸大名の筆頭に過ぎず天皇に従属するとみなす、まさに維新への流れを予見するものであった。『一外交官の見た明治維新』は、激動期の歴史的事件に加えて、幅広い交友の記録としても興味尽きない。サトウは西郷吉之助(隆盛)、大久保一蔵(利通)、桂小五郎(木戸孝允)、伊藤利助(博文)など、倒幕派としての薩摩(サトウは自らの姓を「薩道」と表記)。長州の要人、なかでも西郷と親密であったが、幕府方の勝義邦「安宅(海舟)とも交わりがあった。天皇や將軍慶喜との謁見の記録のほか、政治・社会体制の疲弊を世襲制に帰着させるサトウの見解も興味深い。近代日本の原点としての明治維新という重要な自己の歴史を、他者の目を通して振り返るための古典的名著としてお薦めしたい。

三好達治著 『詩を読む人のために』

(岩波文庫 緑82-3)

教養教育センター長

成田篤彦

国語の教科書で、「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ」という「雪」や、「あはれ花びらながら」と始まる「鶯(いし)のつへ」など、三好達治の詩に接したことのある方も多いと思います。

この本は、三好達治が「前書き」の中で述べているように、「詩を読む若い人々、それも初めて現代詩を読もうとする年少の読者のために」書かれたものですが、その内容は決して子供向けにとどまるものではありません。同じ「前書き」に、著者は「私が以前からその折々に読み続けてきた様々の作品の、その折々に感動あるいは感興を私に覚えしめた跡をたどりたり、もう一度私の過去をふりかえってみるようなつもりで稿を進めました」とも書いていますが、この本の優れた点は、明治・大正・昭和という政治的にも文学的にも激動した近代日本を生きた

た詩人が、その多くに同時代人として身近に接した近代の詩人たちの作品を、丁寧に、誠実に読み、そこから彼の得た感興を、難しい批評用語など使わずにわかりやすく読者に伝えようとするところにあります。

学生諸君が「詩はわからない」と言つのをよく耳にします。しかし、考えてみてください。皆さんが毎日する日常の経験は、事実としてはすべて一定の時間で消え去りますが、そのあとでも、皆さんの内側にはそれらの経験が言葉の世界となつて残ります。皆さんは、日々の経験によつてその内なる言葉の世界を豊かに成長させながら、逆にその言葉の世界を通して、つぎの新しい経験を理解してゆきます。絵画は画家が創造した現実とは別の空間です。音楽は作曲が創造した現実からは独立した音の空間です。おなじように、詩とは詩人が創造し必ずしも現実的な意味を持つとは限らない「言葉の空間」です。ですから、ときにはわれわれの日常的な言語感覚では理解しにくいこともあるでしょう。詩を敬遠する諸君

が多いのはそのせいですが、しかし、詩を読むときに大切なのは、分かるか分からないかではなくて、言葉を通じて新しい体験をすることです。

この本を読むときには、まず、引用してある作品が描き出す空間を自由気ままに想像しながら何回か読んでみてください。そのあとで著者の解釈に読み進んでください。最初に読んだ皆さんの読み方と、三好達治の読み方と同じこともあるでしょう。そうでないこともあるでしょう。同じでなかったからといって読み方が間違っていたことにはなりません。「前書き」にもあるように、詩はまず「めいめいの心で読むべきもの」だからです。しかし、もし最初の自分自身の読み方に加えて、三好達治の読み方にも共感することができたら、二つの感じ方を経験できたわけで、それだけ豊かな言葉の経験ができたと思うべきでしょう。夏休みで時間のあるときに、寝転がってでもかまいません。拾い読みでもかまいません。この本を手に、詩を読んでみてください。きっと皆さんの内なる

言葉の世界を豊かにしてくれることと思います。

細田多穂ほか編

『理学療法士プロフェシヨナル・ガイド 臨床の現場で役立つマネジメントのすべて』の紹介

文光堂

理学療法学科

江原皓吉

この本は、理学療法について学んでいる学生、大学を含む理学療法養成校を卒業して新しい職場で働き始めた新人の理学療法士、及び学生を指導する教員、臨床教育実習で学生を指導する臨床教育実習指導者の先生方にも役立つように編集されています。

理学療法士の学術に関しては、研究活動、学術交流活動、研修活動、教育講習活動が体系化し、成果もあげられているとのこと。しかし、プロフェッションとしての理学療法士の資格は科学的な知識や治療技術だけでは与えられないとのこと。理学療法士は何を身につけなければならぬのか。理学療法士としての資

質となる振る舞い、態度、常識、マナー、勇気などの改革が必要とのこと。

この本の内容は、「理学療法とは何?」って聞かれたら:歴史・法律など。理学療法士の仕事:クリエイティブな仕事・果たして良い職業かなど。PTの職場どのような仕事があるのか?: 大病院での仕事(国公立・私立大学)・リハビリテーションセンターでの仕事など。どのような理学療法士を目指そうか?: 進路相談(就職)・臨床家・研究者・教育者など。理学療法士の生活:男性・女性の悩みなど。社会の常識、理学療法士の非常識・マナー、アチチュウド、コモンセンス:君は社会的役割を果たしているか?ボランティアで社会参加・組織人としての理学療法士 命令と報告など。患者様とのふれあいを考える:患者権利の台頭・あいさつは先になど。チームワークを考える。緊急・救急、院内感染!さてどうする?。理学療法における環境制御 カネ、施設 設備、ヒト。臨床での要点。理学療法のエconomicsなど。生涯にわたって学

ぶことを多岐にわたって書かれています。興味・関心のある内容を一読することを推薦致します。

レイチェル・カーソン著

青樹築一訳 『沈黙の春』

新潮文庫

医学教育センター

河野俊彦

この本の著者レイチェル・カーソン女史は今から五十年前に化学物質に依る環境破壊の怖さを世の中に伝えた最初の研究者です。当時は農薬やDDTなどの殺虫剤がどんどん使われ、生物に対する化学物質の害が無視されている頃でした。しかし、著者はその影響の重大さを予測して、将来自然のバランスが大きく壊れ、春が来ても虫も鳥も鳴かない世界になってしまうと警告したのです。

現在、農薬による自然界の破壊は相当なものです。直接野菜等に農薬をかけなくても、すでに土の中に残留している農薬が大量にあります。川にも海にも流れ出しています。その為、農薬を使用しないと野菜が生育で

きない、という悪循環をきたしています。

実は農薬ばかりではありませぬ。科学の発展は人工の化学物質を無尽蔵に合成し、衣類や食器や建築物や医薬品など生活のあらゆる物品に利用されています。それらは確かに生活に役立つものばかりです。しかし、利用した後の処理がまったくなされていなのが現状です。人工的に作ったものは自然界のバランスを壊しています。知らないところで、害を起こしているところがあります。分解して無害と分かってから、廃棄しなければならぬのに費用をかけたくないので、多くのものはそのまま捨ててしまっています。いわゆる産業廃棄物はその典型です。

食品添加物や医薬品も人工の化学物質が数多く使用されています。そして、これらの化学物質は体内に蓄積され続けています。今は量がそれほど多くないので、アトピーや鼻炎などといった軽度の症状しか見られていません。しかし遺伝子の変化が生じている可能性があります。人工の化学物質は大半はエス

トロゲン様物質です。だからオスの精巣の萎縮が報告されています。また、人でも子宮内膜症が増加しています。そして母親の体内に蓄積された科学物質は、胎盤を通して胎児に届けられてしまっています。人工の化学物質は地球上に無かったものから、未知の物質のままにしておくとも生物滅亡の危機を来たしかねないので、宿題として胎児に送られているのです。

医療に携わる者は地球環境も体内環境にも目を向けて、総合的なより良い医療を心がけていくべきであると思います。ぜひともこの書を読むことをお勧めします。

なおこの書に続けて、森千里著『胎児の複合汚染ー子宮内環境をどうまもるか』中公新書を読まれるよう推奨します。

阿川弘之著

『国を思うて何が悪いー自由主義者の憤慨録』

光文社

教養教育センター

金田健司

米ソの冷戦構造が、アメリカ

の勝利のもとに終焉を迎えた今もなお、共産主義を礼賛・美化し、戦時中の日本が一方的に悪かったとする自虐史観は絶えることがない。そのようななか、著者の阿川弘之氏は、事実だけを、しかも必要な部分だけを伝えようと筆を執ったのが十一年前の平成九年だったが、その後も版を重ね、現在に至っている。

念のために言っておくが著者の阿川氏は右翼ではない。では何なのか？題名にもある自由主義者である。だから阿川氏は、大東亜戦争という言い方さえも嫌う。目次に沿って本書を紹介するならば、大新聞の横暴、なぜか文化人に嫌われる自由主義史観、共産党に愛される軍隊的思想、国の権威をどぶに捨てる政治家、卑下と自虐の果ての反動、国旗に対する国際儀礼を教育しない学校現場、文化大革命を賛美したはずの文化人の都合主義、礼儀知らずのジャーナリストども、天皇制はどのように論じられるべきなのか、植民地経営に見る陸軍と海軍、日の丸及び君が代の由来・・・というところか。最近、ようやく戦後

の自虐史観を見直そうとする風潮が現れてきた。それも、戦後民主主義教育を受けてきたはずの年代から沸きあがってきている。皮肉なことに、日教組や左翼団体が、民主主義や言論の自由を叫び続けてきてくれたお陰で、自分たちが受けていた教育の穴埋めを自己教育し始めたのだ。右も左も、それが極端に走れば必ずや大きなゆり戻しが来る。透徹した自由主義者・阿川弘之の視点から日本の未来を見通した、今こそ学生諸君に読んでもらいたい名著の復刊である。広島・長崎への原爆の投下、大東亜戦争の終結、終戦の詔等、夏には戦争を考えさせられる行事や式典が多くある。諸君が本書を読んで、諸君なりの歴史観を持つて欲しい。本書は必ずやその一助となるであろう。

ジェイムズ・ジョイス著

『ダブリンの市民』

岩波文庫

教養教育センター

桃尾美佳

自他共に認めるbookwormだった

たのは昔の話。分け隔てなく何でも読みたかった往年が懐かしい。のうのうと雑事にかまけるばかりの現在、書棚を省みない日も増えた。読書の愉しみからすっかり遠ざかった大人としては、恥じ入りながら小声で語るより他に、書籍を推薦する術がない。

むしあつい夏の日に読み耽るなら心躍る冒険譚や壮大な大河小説もいいが、ちよつと捻くれて渋い短編小説を紹介したい。本書はアイルランドの都市ダブリンを舞台に、市井の人物の物語をタピストリーの様に織りなした珠玉の短編集だ。位づけを文学に持ち込むのは愚の骨頂ともいえるが、本書の作者は二十世紀最高の小説と称される『ユリシーズ』と二十世紀最大の奇書と呼ばれる『フィネガンズ・ウエイク』を書いたあのジェイムズ・ジョイス、といえば一筋縄で行かない本らしいと想像がつくだろうか。

自立を望みながら家族の呪縛から逃れられない少女や知的生活を重んじるあまり愛を失う中年男など、登場人物は皆まならぬ人生に倦み疲れているが、

作者は「細心卑小」の文体を駆使して彼らの精神の麻痺(paralysis)を克明に描きだす。分かりやすい筋立てではないし泣かせる大団円も笑える落ちもない、けれどもそんなチープな読書体験に飽きが出てくる読み巧者なら、この短編集の暗く謎めいた魅力に惹かれるに違いない。

でもご用心、のめりこんだら最後、ジョイスの言語はどこまでもあなたを幻惑し、文学の極北へ連れ出すだろう。探求心旺盛な人は『フィネガンズ・ウエイク』を紐解いてみよう、ドジソン先生と並ぶ言葉遊びの達人が仕掛けたためくるめく言語体験が待っている。せめても先人の響に倣うべく、及ばずながらこの拙文にもちよつとした遊びが仕掛けてあるから、暇な御仁はお探しあれ。

若さに任せて乱読するのも寝食忘れて精読するのも、大学生の夏の特権。もしできるなら書物の大海を彷徨って一生心に残る本を見つけてほしい。のびやかな想像力と鋭い感受性に恵まれて今こそ、読むべき本は星の数ほどあるのだから。

よい夏休みを。

「小林茂文庫」について 芸術学部美術学科

進藤英幸

小林茂氏の蔵書が本学に寄贈された経緯についていささか述べさせていただきます。彼は平成十八年十月二十二日に心臓発作により五十二歳の若さで急逝されました。学生時代から進取の気性に富み、気持ちのさっぱりとした愛すべき男でした。大東文化大学を出て国立台湾師範大学国文研究科に進学し、主に春秋学や文字学を修めていました。民国七十(一九八一)年六月に詳細な調査・研究の成果を理路整然と、しかも中国語の碩士論文『春秋左氏議礼考述』を台北文史哲出版社から刊行されていた。帰国後、大東文化大学の博士課程を修了し、流通経済大学附属高校に奉職され、生徒及び父兄からも絶大の信頼を得ていたと仄聞していました。七年前、大学から請われて准教授となり、水を得た魚のごとく研究活動に没頭されていきました。中国大陸や台湾にはよく出かけ、当地の博物館や遺跡を調査し、亡くなる前年の夏には、陝西省宝鶏や周原地区の青銅器を調べ

てまわり、さらに翌春には、北京市内の各博物館・研究所に所蔵される青銅器を調査されていきました。

特に彼からの再度の誘いを受け、老骨ながら(進藤)同行した九月、二泊三日の上海博物館見学及び研究図書収集であったが、いつもと変わらず精力的で研究熱心な活躍ぶり、とてモ一カ月後の急逝などは全く夢想だにできなかったことであった。

そんな彼の蔵書を李雪妃夫人から主人のためにも大学に一括して寄贈したい、学生の学習や研究に役立てて欲しいという申し出があり、折りしも彼と同窓の先輩で以前から気心の知っていた細谷恵志教授に依頼し、新設の了徳寺大学の図書館の充実に役立てていただければということになり、幸いにも大学の承認を得、また、李夫人の了解をえて、急遽、寄贈することが決まり、平成十九年九月五日に、蔵書の移送が終了していました。

現在、図書館ではあらためて整理を完了し、館長から「小林茂文庫」目録を作製中であること聞き、故人もさぞ満足していることと拝察しているところです。

大学に於ける図書館と「図書館報」の発刊について

附属図書館長
細谷恵志

本来、図書館は大学の中心的存在である。学生のキャンパスライフは図書館でなされることが多い。授業の予習、レポートの作成、情報の収集等は図書館に於いて行なわれる。大学図書館の役目の一つに学生への良質な図書の提供がある。授業に参考になる図書は勿論のこと、学生が希望する図書の開架は重要である。限られた予算の中でどう希望に叶えるかは図書館の智慧のだどころでもある。大学図書館のもう一つの役目は学生に勉強できるスペースと必要とする学習図書を常時用意することである。そのため多くの蔵書と静かで落ち着いた雰囲気のある閲覧室を確保することが大切である。これに叶えるべく図書館の整備に心掛けています。「館報」の発行に際し、学生のために、夏休みに一読を推薦する図書紹介の玉稿をお寄せいただきました。方々に感謝申し上げます。